



私の生徒 宮澤賢治

三日間セロを教えた話

大津 散浪

それは大正十五年の秋か、翌昭和二年の春浅い頃だったか、私の記憶ははっきりしない。

数寄屋橋ビルの塚本氏が現在のビルの位置に木造建物で東京コンサーバトリーを經營していた。近衛さんを中心に新交響樂團を結成した私達が練習場に困って居たのを塚本氏の好意で、そのコンサーバトリーを練習場に借りていた時のことである。

ある日歸り際に塚本氏に呼びとめられて、『三日間でセロの手ほどきをして貰いたい』と云う人が来ているが、どの先生もと

何とか三日間だけ見てあげて下さいよ。』と口説かれた。

當時私は新響でバストロムボーンを擔當して、圖書係を兼務した上、トロムボーンの休みの曲にはセロの末席に出ると云う多忙さで、住居はと云えば、在原郡調布村宇嶺(現大田區千鳥町)と云つて、當時は大層不便な所だったので一層條件が悪かった。

塚本氏の熱心さに負けて遂に口説落された私が紹介されたのは三十歳の五分刻頭で薄茶色の背廣の青年で、塚本氏が『やつ

ても出来ない相談だと云つて、とりあつてくれない。岩手縣の農學校の先生とかで、とて

も眞面目そうな青年ですがね。無理なことだと云つても中々熱心で、しまいに楽器の持ち方だけでもよいと云うのですよ。

と承知して貰いました大津先生です』と云うと『宮澤と申します、大層無理なことをお願い致しまして……』と柔和そうな微笑をする。『どうも見當もつかない事ですがね、やつて見ましよう』と微笑で答えて、扱、二人の相談で出来上つたレッスンの豫定は、毎朝六時半から八時半迄の二時間ずつ計六時間と云う型破りであつた。

神田あたりに宿をとつていた彼は、約束通りの時間に荏原郡調布村まで来るのは仲の努力だつたようだが、三日共遅刻せずやつて来た。八時半に練習を終つて私の家の朝食を一緒にたべて、同じ電車有楽町まで出て別れる……これが三日つづいた。第一日には楽器の部分名稱、各弦の音名、調子の合せ方、ボーイングと、第二日はボーイングと音階、第三日目にはウエルナー教則本第一巻の易しいもの何曲かを、説明したり奏して聞かせたりして、歸宅してから自習の目やすにした。ずい分と亂暴な教え方だが、三日と限つての授業では外に良い思案も出なかつた。

三日目には、それでも三十分早くやめてたつた三日間の師弟ではあつたが、お別れ

の茶話會をやつた。その時初めて、どうしてこんな無理なことを思い立つたか、と訊ねたら『エスプレントの詩を書きたいので、朗誦伴奏に思つてオルガンを自習しました。どうもオルガンよりもセロの方がよいように思いますので……』とのことだつた。

『詩をお書きですか、私も詩は大好きで、こんなものを書いたこともありません』と私が警察から取り出したのは、大正五、六年の『海軍』と云う畫報の合本で、それには軍隊員時代の拙作が毎月一篇ずつ載つていたのである。

今日の名聲を持つた宮澤賢治だつたら、いくら人見知りをしてない私でも、まさか自作の詩らしいものを見せる度胸は持たなかつただろうが、私はこの時詩人としての彼を全く知らなかつたのだ。

次に讀んで行つた彼は『先生の詩の先生はどなたですか』と云う『別に先生はありません泣菫や夜雨が大好きな時代もありましたが、今では尾崎喜八さんのものが大好きです』と答えると、彼は小首をかしげ乍ら、大正五年頃にこんな書き方をした人

け居ないと思つていましたが……』と云つて私に示した一篇は——古い日記から——と傍見出しをつけた舊作で南太平洋上の元旦をうたつた次のようなものであつた。

呀た時鐘で目がさめた午前四時——
釣床の中で耳をすますと
舷側で湯がどおり乍ら
お正月お正月とさんざめく

士官次室から陽氣な話聲がきこえる
今、艦橋から降りたばかりの〇〇中尉が
除夜の鐘ならぬ正午の八點鐘をうつつ
艦内一の果報者と羨まれて居る
(絶世の美人を女房にもてるげな)

(中略)

風涼しい上甲板の天幕の下で
天皇陛下の萬歳を三唱し
大きな茶碗で乾盃したあとは
金盃にもられたぶつき氷が一等の御馳走
走だ南緯三十三度のお正月はとにかくに
勝手が違ふ——明日は Newzealand の
島山が見える筈——
と云つたので、全くマドロスの手すさびに
すぎないものだが、篇中の——と(一)

を指して、大正五六年にはまだ使われて居なかつたように思ひ、と云うのであつた。

當時、私の家は兩隣りへ二三町もある一軒家で割合に広い庭には一本のえにしだと何か二三本植つて居たのに對して、彼はしきりに花壇の設計を口授してくれした。そして、えにしだの花は黄色ばかりと思つて居た私は、紅色の花もあることをその時彼から教わつたのだ。

ウエルナー教則本の第一と信時先生編のセロ名曲集一巻を進呈して別れたのだつたが數日して彼から届いた小包には、『注文の多い料理店』と溢い装頓の『春と修羅』第一集が入つて居て、扉には
獻大津三郎先生 宮澤賢治
と、大きな几帳面な字で記してあつた。
春と修羅を讀んで行くうちに、私の生徒が誠に尊敬すべき詩才の持主であることを感ぜずには居られなかつた。
妹さんの臨終を書いた『永訣の朝』などは泪なしには讀めず(あめゆじゆとてちてけんじや)と云う方言がいつまでも腦裏を離れない。